特集 アジアに息づく舞台芸術のイニシアティブ

アジアに点在する舞台芸術の創造拠点を一挙紹介。様々な国と地域で、伝統的な演劇と現代的作品が交錯し、舞台芸術の枠を超えて、ハイブリッドな表現と交流が促進されている。

中国

北京

2000年代以降台頭してきた先鋭的なアートの受け皿として、中国では近年、舞台芸術祭が盛んに行われるようになった。きっかけとなったのは、2001年から始まった金刺猟大学生演劇祭。その青年部門が独立するかたちで08年に11演目という小規模で始まった北京国際青年演劇祭（北京フリンジフェスティバル）には、今年60演目を超える作品が参加。工場跡地のアートスペースを中心に行なわれる798芸術祭には現代美術も含めた最先端のアーティストが集う。2012年からは、北京、広州、香港の三大現代舞踊団が共催する北京ダンスフェスティバルも始動。
※出身作家：新青年芸術劇団（F/T12公募）

798芸術祭 ©Hitomi Oyama

上海

上海では、いち早く1999年に中華人民共和国文化部主導で上海国際芸術祭を開催する一方、前後して98年に上海戯劇学院を中心に上海国際小劇場演劇祭が始まった。また、上海演劇の中核をなす上海ドラマティックアーツセンターが主導して、上海当代演劇祭などさまざまなフェスティバルを展開している。その他、アマチュア劇団に対し、無償で劇場を貸し出すという試みを続けている下河迷倉（Mecooon Space）主催のメコンフリンジフェスティバルの活動も注目される。

メコンフリンジフェスティバル
©Mecooon Space

香港

東西情報の集積地として早くから海外に開かれていた香港では、1973年から毎年香港アートフェスティバルが催され、77年には芸術教育と芸術の海外交流拠点として、香港アートセンターが開設されている。また2002年から2年に一度行なわれているニュービジョンアートフェスティバルは民族芸能からストリートダンスまでマルチカルチャーな演目で注目を集めている。

香港アートセンター

シンガポール

1965年にイギリスから独立し、比較的若い国であるシンガポール共和国では、シンガポール・ナショナル・アーツ・カウンシルが主導するかたちで、演劇、美術、音楽や文学など、積極的に文化的インフラを開拓してきた。77年にはシンガポール・アート・フェスティバルがスタート。そのほかシンガポール・フリンジ・フェスティバル、現代アートの国際展シンガポール・ビエンナーレなどがある。さらに、演出家のオン・ケンセン氏が設立した助成団体アート・ネットワーク・アジア（ANA）は、国際的な文化交流を促し、若い人材の育成に力を入れている。
※出身作家：ダニエル・コック・ディスコダニー（F/T12公募）

シンガポール・アーツ・フェスティバル
Singapore Arts Festival;
photo courtesy of National Arts Council

韓国

ソウル

2000年代から舞台芸術が飛躍的な発展をしており、フェスティバル・ボム、SPAF（ソウル舞台芸術祭）、マージナル・フェスティバル、SIDance（ソウルダンスフェスティバル）など、様々なフェスティバルがある。舞台芸術のメッカと呼ばれている大学路（デハンノ）では100カ所以上の劇場が密集しており、10年にはデハンノにある公共劇場が統合され韓国舞台芸術センター（HanPAC）が設立された。アーツ・カウンシルやソウル文化財団のような国や自治体による公的支援が増えつつあると共に、斗山（Doosan）アートセンターやLGアートセンターなどの民間企業による支援も活発に行なわれている。
※出身作家：グリーンピグ（F/T12主催）、Co-Labプロジェクト・グループ（F/T12公募）

グァンジュ（光州）

現代アートの国際展・光州ビエンナーレでも知られている光州では、アジアの文化的ハブを目指す国策事業の一環として国立アジア文化殿堂が2015年に開館を予定。そのなかでも中心的な施設になるアジア芸術劇場は、アジアを視野に入れた舞台芸術の製作に力を入れる方針だ。すでに10年からは製作支援公募プログラムも始まり、11年にはポツドールが選定されている。

HanPAC／アルコ芸術劇場

キム・ジソン『Well-stealing』©フェスティバル・ボム

台湾

1992年ナショナルシアター、実験劇場を有する国立中正文化センターが教育部所轄の文化教育施設としてスタート。内外の舞台芸術の発展に力を入れるだけでなく、舞台芸術専門誌の発行、台湾国際芸術祭の主催なども。その他、台北市内で開催される台北アートフェスティバルには2012年、日本から岡崎芸術座も参加。その他、国立台北芸術大学主催の関渡アートフェスティバル、華山リビングアーツフェスティバル、台北フリンジフェスティバル、台湾ウーマン・シアター・フェスティバルなどがある。高雄市内で開催される高雄スプリングアートフェスティバルは10年にスタート。大型の劇場だけでなく、牯嶺街小劇場、文山劇場などの小劇場も年々増えている。
※出身作家：WCdance、アゲインスト・アゲイン・トゥループ（F/T12公募）

台北アートフェスティバル
2012Taipei Arts Festival
“Play Bauhaus Exhibition”, © Teng,Hui-en

インドネシア

ジャカルタのイスマイル・マルズキ公園アートセンターの設立により、1970年代は「演劇の春」と呼ばれるほど、多くの戯曲や演出家が世に出ることになった。また、68年にスタートし、75年より現在の名称となるジャカルタ・ビエンナーレは、現代のインドネシアを代表する美術祭である。92年に設立されたインドネシア・ダンス・フェスティバルは、国内のコンテンポラリー・ダンスに対する認識を高めながら、海外の振付家とダンサーが出会える場を提供し、国際的対話やコラボレーションを促進させている。
※出身作家：シアタースタジオ・インドネシア（F/T12公募）

ジャカルタ・ビエンナーレ

タイ：
バンコク・シアター・フェスティバル（舞台芸術祭）

フィリピン：
フィリピン国際芸術祭（国際芸術祭）

カンボジア：
アムリタ・パフォーミング・アーツ（団体）

ミャンマー：
iUi（国際演劇祭）

マレーシア：
クアラルンプール舞台芸術センター（施設）

F/T公募プログラムに集う、アジア新世代のアーティストたち。彼らが根ざす地域の、舞台芸術シーンのいま。

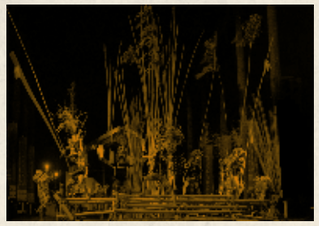
Asia's Next Generation Artists and Performing Arts Scene

インドネシア

1970年代は、ジャカルタにイスマイル・マルズキ公園アートセンターが設立され、「演劇の春」と呼ばれるほどインドネシアの演劇史に残る戯曲や演出作品が多く生まれる時代だった。その後のインドネシアの演劇は、西洋の戯曲を上演しながらも豊かな伝統文化を作品に取り入れ、インドネシア全体に共有のできる文化の可能性を探求している。また、伝統舞踊と現代的な身体表現を接続する若いダンス・シーンがいま、世界的に注目されている。

シアタースタジオ・インドネシアはジャカルタから100キロほど離れているバンテン市に在住しているアーティストたちによるグループ。2011年「Maximum City」をテーマに行なわれたジャカルタ・ビエナーレに参加した彼らは、自らの活動の拠点に、あえてジャカルタではなく地方を選んだ。演劇がほとんど普及していないバンテン地方に伝わる、独特なヒンドゥー・イスラム教の伝統文化を演劇の手法で現代化させ、問い直すことが出発点だ。地方と前衛的演劇の出会いを目指しているシアタースタジオ・インドネシアは、現地の農民、プロの俳優や大学生などをコラボレーターとして起用し、演劇創作の新しいかたちを探っている。

© Afrizal Malna



装置から衣裳、楽器に至るまで竹を使用した野外劇
『バラバラな生体のバイオナレーション！』
シアタースタジオ・インドネシア
演出：ナンダン・アラデア
11月9日（金）～ 11月11日（日）
於：池袋西口公園

中国

2000年代以降、中国の舞台芸術界は大きな変化を遂げてきた。長い間中国では、共産党指導の下に成立した芸術団体及び、そこに所属する舞台人が独占的に公演を行ない、国家が劇場を運営してきたが、近年の小劇場演劇の隆盛に伴い、民間経営手法を取り入れた小規模劇場や劇団が次々と設立されるようになった。現在でも多くの舞台人が、中央戯劇学院（北京）、上海戯劇学院といった専門の国立養成機関を経て、舞台芸術関係の仕事に就いていくものの、一般大学の学生も含め、大学時代の演劇活動等を土壌に、卒業後、自分たちで自由に劇団やエンターテイメント会社を設立して、活躍の場を広げていく若いアーティストたちも出てきた。

このような多種多様な舞台人の出現を受けて始まったのが、小劇場演劇を対象とした演劇祭だ。現在最も規模が大きい「北京国際青年演劇祭」は、海外演劇祭で話題になった作品を招聘するほか、優秀な作品・個人に各種賞を贈るなどし、若手アーティストを発掘している。今回来日する新青年芸術劇団の演出家、リー・ジエンジュン氏も、昨年同演劇祭で、最高賞である審査員特別賞を受賞した。

最近では、北京の演劇祭で上演した演目を一部巡回させる形で、地方都市でも次々と演劇祭が立ち上がっているほか、演劇を職業としないアマチュア演劇人の増加を背景に、“非職業、非商業”を謳った「非非演劇祭」なども開催されている。

© Xia MaoTian

中国独立系演劇界の若手が、魯迅に取り組む
『狂人日記』
新青年芸術劇団
演出：リー・ジエンジュン
11月10日（土）～ 11月11日（日）
於：あうるすぽっと

台湾

1980年代、演劇本来の芸術性の確立を目的とした「小劇場運動」が台湾でも盛り上がり、それに伴い、数々の劇団、小劇場が設立される。当時、最も勢いのあった劇団「蘭陵劇坊」のメンバーは、90年代に入ると独立し、個々の劇団を立ち上げたり、国立台北芸術大学などの創設者となる。リン・ウェンチョンは、本大学のダンス学部を卒業。2000年以降、内外の芸術大学出身者だけでなく、様々なメディアや表現手法を取り入れ演劇制作に取り組む新たなつくり手たちの存在も目立つようになる。その一人がホアン・スーノンだ。彼らのような若手は、台北フリンジフェスティバルや華山リビングアートフェスティバルなどに参加することで、知名度を上げることになる。また、00年以降は、台湾政府による文化、芸術への助成が盛んになる時期でもある。その一環として、台湾各都市でのフェスティバル開催や、ハード面での政策としての多元的な文化施設の建設にも力を入れている。代表的なスペースとしては、華山リビングアートフェスティバルを主催する華山芸文中心などがある。そのほか、90年以降増え続けているのが、劇評をメインとした関係者によるブログやウェブサイト。誌面での劇評ページが減るなか、これらのサイトは演劇を楽しみ、理解するうえで非常に重要な役割を担っている。近年の芸術家支援のための基金会の設立も目立つ。なかでも、台新銀行文化芸術基金会は、毎年アワードをもうけ、受賞者の演出家やアーティストに対し多大な支援をしている。

© WCdance

コンテンポラリーダンス×南管音楽。
『小南管』
WCdance
振付・演出：リン・ウェンチョン
11月15日（木）～11月17日（土）
於：シアターグリーン BOX in BOX THEATER

台湾「ガラスの少年」世代に焦点を当てる
『アメリカン・ドリーム・ファクトリー』
アゲインスト・アゲイン・トゥループ
作・演出：ホアン・スーノン
11月22日（木）～11月24日（土）
於：シアターグリーン　BOX in BOX THEATER

シンガポール

1965年にイギリスから独立したシンガポール共和国は、中国系、マレーシア系、インド系、多民族の人々が共存している、多様性がアイデンティティという独特の国家である。独立時、殆どの人口は中国、マレーシアやインド出身の出稼ぎにきた労働者であり、国民の間で、いわゆる共通する宗教、伝統文化や習慣の存在が非常に薄かった。その状況に対し、シンガポール・ナショナル・アーツ・カウンシルが国民の文化に対する認識を積極的に高めようとし、演劇、美術、音楽や文学など、文化的インフラストラクチャーの設計に取り組んできた。

振付家・ダンサーのダニエル・コックは、ヨーロッパで美術と演劇を学んだ後帰国、2010年まで国内で活動を続けてきた。その後渡独し、12年にベルリン芸術大学でSolo/Dance/Authorshipの修士号を獲得。中国人、日本人、フィリピン人のアーティストとのコラボレーションをするなど、アジアとヨーロッパを結ぶ架け橋のような役割を果たしている。

© Sven Hagolani

ネットサイトで出会った男性たちへの返礼
『ゲイ・ロメオ』
ダニエル・コック・ディスコダニー
構成・振付：ダニエル・コック
11月16日（金）～11月18日（日）
於：シアターグリーン BIG TREE THEATER

韓国

民主化が始まった1990年代から文化芸術が急速に発展し、2010年に韓国舞台芸術センター（HanPAC）が設立されるなど、様々な劇場やフェスティバルが新設されてきた韓国。00年代後半からはダウォン（多元）芸術という枠がつくられ、ジャンルを横断する作品を支援している。『Co-Lab：ソウル―ベルリン』は、HanPACの新人アーティスト育成プログラムに選定された作品で、2012年3月に若手振付家プログラム「ライジング・スター」で初演された。Co-Labプロジェクト・グループの振付家イム・ジエとファン・スヒョンは、HanPACの芸術監督でもある女性振付家アン・エスンのダンスカンパニー出身。

また、F/T12アワード審査員であるソ・ヒョンソクとF/T11公募プログラムに参加したジョン・グムヒョン等のダウォン芸術アーティストが、新しい形式の作品で世界的にも注目されている。毎年春に開催されるフェスティバル・ボムは韓国の代表的なダウォン芸術フェスティバルである。12年の秋には、SPAFやSIDance、PAMS（ソウル舞台芸術見本市）が開かれるほか、光州ビエンナーレやソウルメディアシティなど、様々な芸術イベントが集中的に行なわれる予定だ。

ベルリンとソウル。遠く離れた二人の対話
『Co-Lab：ソウル―ベルリン』
Co-Lab プロジェクト・グループ
振付：ファン・スヒョン、イム・ジエ
11月10日（土）～11月12日（月）
於：シアターグリーン BOX in BOX THEATER

日本

F/T12公募プログラム、日本からは5つの作品が参加する。

© 三野 新 / Arata Mino

劇場空間で繰り返される写真撮影という行為
『あたまのうしろ』
ヒッピー部
構成・演出：三野 新
11月14日（水）～11月18日（日）
於：シアターグリーン BASE THEATER

© 青木祐輔

エルフリーデ・イェリネクの戯曲作品に取り組む
『雲。家。』
重力／Note
構成・演出：鹿島将介
11月21日（水）～11月24日（土）
於：シアターグリーン BIG TREE THEATER

© 平早勉

三島由紀夫『美しい星』の舞台化に挑む
『美しい星』
ピーチャム・カンパニー
構成・演出：川口典成
11月12日（月）～11月20日（火）
於：The 8th Gallery（CLASKA 8F）

120日間で勝敗を決める、一日一手の将棋の対局
『キメラガール アンセム／120日間将棋』
The end of company ジエン社
作・演出：作者本介
11月7日（水）～ 11月11日（日）
於：シアターグリーン BASE THEATER

舞台上で繰り広げられる貨幣の交換
『不変の価値』
集団：歩行訓練
構成・演出：谷 竜一
11月21日（水）～ 11月24日（土）
於：シアターグリーン BASE THEATER

執筆：クラウトハイム・ウルリケ（インドネシア、シンガポール）、李丞孝（韓国）、小山ひとみ（台湾）、吉岡真衣子（中国）、小森あや、喜友名織江